

お便り

POST

◇読者から◇

日本保育学会第69回大会 (in 東京) に
行ってきました。

国際シンポジウム「ヨーロッパ・ベルギー
における保育の政策と実践」に参加した。

シンポジストであるヘント大学のミシェ
ル・ヴァンデンブロック氏が語るヨーロッパ
における保育の政策、課題から、日本の保
育・子育て支援における実践のヒントを得ら
れた思いである。多様性を大切にすることに、
より重点を置いていくことこそが、これから
の保育・子育て支援の鍵となるのではないか、
と個人的には考えさせられた。(I)

今年初めて、留学生として保育学会に参加
することになりました。今回のテーマは、「乳
幼児期の教育 / 保育の再構築— 研究と実践と
政策を越境する—」でありました。

二日間の大会では、海外・国内の保育にか
かわる多様な分野に分かれて、発表やシンポ
ジウム、講演などが行われ、さまざまな分野
(大学、現場、研究所など) の人々に会おう
ことができました。一方に偏らずに、幅広い
分野で、乳幼児期の教育・保育について工夫
していることに気付きました。(C)

初めてのポスター発表。興味を持って足を
運んでくださった方々と、近い距離で話し合
えたことが何よりの収穫でした。そして私自
身も興味の赴くままに会場を歩いていたら、
学生時代の同級生にバツリ！ 日頃の活躍
は知っていたけれど、直接語り合えたことは
いっそう励みになりました。また、郷里の方
とも出会いました。遠くでも保育を語り、発
信している方がいることを知ってうれしくな
りました。人と人との出会い、つながりの大
切さを実感した一日となりました。(S)

絵本の紹介

『おいで、フクマル』

くどうなお作 / ほてはまたかし 絵 小峰書店 2009年

『あるひ あるとき「おーい おいで」と だれかに
よばれて ぼくは うまれた。なまえは「フクマル」。
ぼくを このせかいに よんでくれたのは だれ?』

ぼく＝フクマルは、保手浜さんが描く通り、つぶ
らな瞳の、顔の大きな、犬 (であるらしい)。

『みんな ぼくと あそびたがっている。』『ちきゅう
とも おひさまとも あそぼう！ いつまでも。』

そうか。そうなんだ。人は皆、誰かに呼ばれて、
生まれてきたんだ。いつもながら、工藤直子さんの
生きるものへのまなざしと寄り添い方は、淡々と温
かく強く、優しい。(KT)

本の紹介

『社会の中で居場所をつくる 自閉症の僕が生
きていく風景 (対話編)』東田直樹 山登敏之
往復書簡 ビッグイシュー日本 2016年

雑誌『ビッグイシュー日本版』に掲載された往復
書簡と対話が収録されている。東田さんは1992年
生まれの作家。13歳の時に書いた『自閉症の僕が
跳びはねる理由』をはじめ、エッセイや詩集、絵本
などの著作がある。

作家 東田直樹の「一ファン」に過ぎなかったと
いう精神科医の山登さんと、10回ごとに攻守を入
れ替えてのやりとりには、本にした段階でついたで
あろう10回ごとの巧みなタイトルがついている。
「原始の感覚、未来につながらない記憶」「純粹さ、
うしろめたさ、嘘、そして夢」「[共世界へのためら
いがちな参入]のために」など。そして、対談の見
出しには、「僕は笑ってもらえると、うれしい。悲し
んだりされるとつらい。」とある。各回のおおそ
を連載中に読んでその都度うなずいたりうなずたり
していたが、改めて本書を手にしたくなかったのは、
各章のタイトルがとても魅力的だったせいも大いに
あると言える。(KT)